

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準2. 学生
2-2 学修支援

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 a：効果が上がった点 b：改善が必要な点	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期の計画)
① 教員と職員等の協働をはじめとする学修支援体制の整備					
教職協働による学生への学修支援に関する方針・計画・実施体制を適切に整備・運営しているか。	全学教育委員会、学生支援等連絡会など、学修支援にかかわる全学委員会や各学部教務委員会、学生委員会において、教員、事務職員の両方が出席して、意見交換と問題の共有をしている。ハラスメント防止などに関わる授業や学修支援センターの運営には、教員だけでなく、事務職員も大きく関与している。デザイン学部では、各演習科目担当教員による「感性演習教育連絡会」「スキル演習教育連絡会」、専門演習と卒業研究の「各専攻別教育連絡会」という科目、専攻別の教育連絡会を月に1度担当する全教員の出席により開催し、すべての科目で学生の修学状況を確認し問題があれば対処、解決に取り組んでいる。また連絡会の議事録は会議後に学部の専任教員全員で閲覧、問題となる事案を共有することで学部内の連携が図られている。	(改善計画) アドバイザーグループでの面談等で、各学生について、学修に困難を感じている授業を詳細に把握し、学生任せではなく、アドバイザー教員が学修支援センターの担当教員らと情報を共有し、当該学生の利用を勧告する。 (改善状況) 学修で困難を極める学生については教育連絡会などの連携をはじめ、学生委員会を中心に学生の対応が改善された結果、休退学の学生数が年々減少している	a：教員と事務職員が協働して学修支援を行う仕組みが確立しており、さらに発展させる。学部における教育連絡会により、問題ある学生の教員同士での情報交換、さらには問題についての意見交換を行い、改善につなげている。また議事録を学部全教員で共有し、学務課とも連携をとりながら問題の早期発見と対応を行なっている。 学修支援センターの存在を知らない学生が多数いるため、年次ガイダンス内での告知、新入生にはフレッシュャーズゼミなどの告知で活用するように促す。	他の大学での成功事例を収集し、SD、FDの一環として共有することにより、教員と職員が協力して学修支援にあたる。フレッシュャーズゼミ、キャリアデザインでの授業と学修支援センター（文章表現）、キャリアサポートセンター、図書館との連携を進める。	アドバイザーグループでの面談等で、各学生について、学修に困難を感じている授業を詳細に把握し、学生任せではなく、アドバイザー教員が学修支援センターの担当教員らと情報を共有し、当該学生の利用を勧告する。また演習等の授業内では、普段とはまた異なる学生の様子もわかることから、授業期間中に毎月実施する教育連絡会の位置付けを重要視して、問題共有の仕組みを活用させる
障がいのある学生への配慮を行っているか。また、具体的にどのような配慮をしているか。	障がいのある学生に関して、「アドバイザーグループ/AG（フレッシュャーズ・ゼミや研究室の教員）」を通じて早期把握し、学部と学務課において情報集約している。四肢の障がいに加え、発達障がいなど精神面や大学生活に障がいのある学生に対しても、他の学生と平等な学修環境を実現するための努力を行なっている。近年では入学前に保護者からの希望を聞き対応可能な事項について配慮を行ってきた事例もある。環境整備の一環として、多目的トイレの設置、自動ドアの設置、階段シール整備の整備などを行った。障がいを持つ学生については、身体障がい、知的障がい、精神障がいなど種類別、その重度により個別の配慮を行っている。配慮を望むと申告してきた学生には、要望を聞き取った上で対処している。その他の配慮が必要と思われる学生については、個別の面談を通して、配慮を希望するか否かの意思確認をした上で、適切な対処をしている。また就職活動においても障がい者雇用の紹介に特化した就職エージェントを活用するなど、ノウハウを蓄積している	(改善計画) 問題が生じた場合に、速やかに相談できる専門的な知識を持つ職員が必要と考える。 (改善状況) 学生への適時な面談を通じ、障がいのある学生の「兆候」を感じ取る、または兆候のある学生から直接に話を聞くなど、学生対応のノウハウを蓄積してきたことで、より協力する体制が整っている	a：a：各個人の状態に合わせて合理的な配慮を行っており、学生の反応も概ね良好である。最近では入学前に事情の説明が多くなり、対応のための時間的な余裕も生まれた b：重度の症状、または緊急時の対応については、教員のみで対応することが極めて困難な場合が多い。昨今は学生相談室、医務室等が明らかに繁忙を極めており、また普段の兆候もなく軽度な場合、学生本人への配慮もあり、引き続き慎重な対応が迫られている。	問題を抱える学生を早期に把握するためにも、アドバイザーグループ担当教員、演習授業担当教員の連携を強化する。デザイン学部には就職特任教員も在籍しており、就職指導の本務担当の時間とは別に、対応が可能か、資格を有する教員の採用も視野に入れている	問題が生じた場合に、速やかに相談できる専門的な知識を持つ専従の職員が必要と考える。新入生にはAG毎にピアサポーター（S.A.）の配属が可能になったことから、状況をいち早く把握できるS.A. 学生からの報告も重要視したい。
オフィスアワー制度を常勤・非常勤を問わず全学的に実施しているか。	すべての授業科目で、常勤、非常勤を問わず、シラバスにオフィスアワーの記入を義務付けている。すでにシラバスでの表記が義務づけられていることもあり、授業担当の専任教員および非常勤（兼任講師）はオフィスアワーでの対応を実施してきた。	(改善計画) 教員室のドアの掲示やデザインを工夫し、より学生が教員を訪問しやすくする。オフィスアワーの時間も制限があり、相談に訪れた全ての学生の対応が困難な場合もあるため、メール等であらかじめ相談内容を把握し、面談時間を短縮するなどの仕組みを作る。 (改善状況) デザイン学部の主要研究室は基本的に複数の教員が在室しており、これまで当該の教員が不在でも他教員が対応することができた。また大学のメール、Moodleを活用して学生からの意見をすいあげることが可能であり、より活用が期待されている	a：シラバス点検時に、よりオフィスアワーに注意して点検する。相談したい学生が、確実に教員とコンタクトできるようになった。 b：実際にはオフィスアワーの時間帯は学内の移動時間もしくは授業準備、食事の時間などで、教員を訪れる学生はそれほど多くない。	シラバスチェックの際に「メールで問い合わせること」と記載があれば、確保している曜日・時間を具体的に記入するよう科目担当教員に求めることにする。また研究室に直接訪れるのではなく、メールやMoodleを活用し、あらかじめアポイントをとるような仕組みを作る。学生と教員のみ閉ざされた関係に発展しがちで脆弱なSNSに頼らない大学、学部独自の連絡サービスも急務である。	教員室のドアの掲示やデザインを工夫し、より学生が教員を訪問しやすくする。オフィスアワーの時間も制限があり、相談に訪れた全ての学生の対応が困難な場合もあるため、メール等であらかじめ相談内容を把握し、面談時間を短縮するなどの仕組みを作る。
中途退学者、休学者及び留年生への対応策等を行っているか。	休学や退学を減らすため「アドバイザー制度委員会」を設置し、対応策を立案実行している。学生への面談やアンケートを通じて、休退学に至る理由や状況を分析し、授業の改善や学修環境の改善などに役立てている。アドバイザー教員は休退学希望者との面談を行い、必ず「面談シート」に学生の状況と対応、そして休退学の事由を記載、休学中には復学にむけたフォローを行っている。中途退学者、休学者への対応は、学部で実施の各演習ごとの教育連絡会で、欠席が続いている学生、問題ある学生についての情報共有を行っており、のちに休退学につながりそうな学生を早期に発見することに努めるなどの対応を行っている。	(改善計画) 現状では早期に復学できる数は少ない。精神的な理由によるものが半数以上であるため、専門的な知識を持つ職員と連携する仕組みを作る必要がある。 (改善状況) 改善の方向に向かっていたが、2020年度以降は新型コロナウイルス感染症の対応措置により、明らかに教員の業務が増大している事実から、精神的な耗弱状態にある学生の把握、対応がより困難になっている。専従の教員もしくはカウンセラーの登場が切に待たれる	a：定期的に連絡を取ることで、休学中も復学する意欲を失わず、早期に復学することができた。 b：早期に復学できる数を増やす。最近の傾向としてメール等による連絡が不通になる事例が多く、また保護者への連絡も同様で、大学に登録された連絡先であっても、保護者不在のまま時間が経過する状況がある。	休学中にも自宅でできる課題等を課し、復学へ希望を持たせることで、どのような状況でも休学というコンプレックスを抱かせない。またAG担当教員による定期的な連絡も欠かせないことから、定時連絡の有無も面談シートに記入させることにしている。	現状では早期に復学できる数は少ない。精神的な理由によるものが半数以上であるため、障がいのある学生対応と同様に、専門的な知識を持つ職員と連携する仕組みを早急に構築する必要がある。
② TA等の活用をはじめとする学修支援の充実					
教員の教育活動を支援するために、TAなどを適切に活用しているか。	演習科目を中心にTAを配置し、教員の監督下で、授業の補助を行っている。また、フレッシュャーズゼミにS.A.（ピアサポーター）を配置、同年代の学生の視点を授業運営に採り入れ、入学者が早期に大学生活へなじめるように工夫している。また次年度の非常勤講師採用計画を毎年11月より開始し、各授業での運用上適切な配置検討を行なっている。採用担当教員が授業に必要な非常勤講師（兼任講師、演習講師、T.A.、S.A.）を予算と需要等適切かどうか学部予算の枠組みを踏まえて調整を行っている。	(改善計画) 現在他大学からTAを募っているが、来年度より大学院が開設されるため従来のTA制度を見直し、新たな制度作りを計画する。 (改善状況) 大学院の設置認可によりT.A.候補の学生が増え、他大学からの学生に頼らず依頼することが可能になった。また支払われる謝料で、学生の学費負担の軽減に微力でも役立っており、適切な運用と言える	a：履修学生の出席管理や、演習の準備作業などを任せることで、教員が教育指導にかける時間を確保することが可能となった。 b：大学院開設に伴うTA制度の見直し。カリキュラムの改定により、演習、実習の内容に即したT.A.の人数を精査する	現状をベースに、業務内容を精査しより一層の効率化を図る。一例として科目履修者に対応するT.A.の人数を基準として明確にする、現在は前後期で2コマしかない授業時間外の担当にも、準備に相応なコマ数を設定するなど、実情に合った改善が必要。	大学院が開設されたことにより、学内T.A.の確保が簡易になったものの、依然人数は少ないため、一人の学生が担当する時間が増えることで、研究、制作時間の確保と反比例することもあり、従来のT.A.制度、条件を見直し新たな制度作りを計画する。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準2. 学生
2-3 キャリア支援

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備					
インターンシップなどを含め、キャリア教育のための支援体制を整備しているか。	1年次「フレッシュャーズゼミⅠ、Ⅱ」に始まり、2年次「キャリアデザインⅠ、Ⅱ」、3年次「キャリアデザインⅢ、Ⅳ」全てのカリキュラムを毎年見直しながら、内容の継続性、重要な部分の復習を重視し、また最新の動向、就職協定などに則ったテーマに限り、適時性のある授業を進行している。	（改善計画）新たに設置する大学院への進学を希望する学生に対応したキャリアデザイン教育の内容を確立させる。さらに大学院での就職先についても同様の精査が必要である。 （改善状況）現在、2年次まで進行中の新カリキュラムによりキャリアデザイン教育の到達目標が明確になりつつある。	a : 1年次から連続性のあるカリキュラムを構築してキャリア形成を意識させることができています。 b : 年次毎の学生気質の把握、人気の就職先や学部にあわせた企業の開拓、大学院進学希望の学生対応等が必要である。現在、次年度以降の就職協定の見直しと維持が混在しており、学生の希望する業界ごとに企業の採用スケジュールの把握、その対応が急務である。	キャリアデザイン科目の内容を拡充させて学部の専門性を強く意識させる、またはアピールさせるための学部独自のカリキュラム作成が急務であることから、令和2年度より1年次前期「フレッシュャーズゼミⅠ」、後期に「キャリアデザインⅠ」とし、2年次「キャリアデザインⅡ、Ⅲ」、3年次「キャリアデザインⅣ、Ⅴ」として最新の動向、就職協定などに則ったテーマに限り、適時性のある授業で進行。	新たに設置する大学院への進学を希望する学生に対応したキャリアデザイン教育の内容を確立させる。さらに大学院での就職先についても同様の精査が必要である。令和3年度以降、新型コロナウイルス感染症による影響の早急な精査が必要であり、業界の動向にも併せて授業内容を改善していく。
就職・進学などに対する相談・助言体制を整備し、適切に運営しているか。	全学生に進路指導担当教員を設定して、卒業制作指導と個人面談を重ねてきた。また、毎月の学部長による就職ヒアリングにより学生個人の活動状況を把握し、情報を教員間で共有する体制を継続している。2017年度から学生の希望により進路指導担当教員を決定することで、学生の研究領域、進路の希望などを把握しやすくなった。 八王子、蒲田両キャンパスに「キャリアサポートセンター（CSC）」及び「キャリアコーポレーションセンター（CCC）」を設置し、就職活動準備や就職活動に関する対策・実践講座・セミナー（社会人マナー、面接・エントリーシート対策、業界・業種研究会、合同企業セミナー、個別企業セミナー、就職活動マッチング、キャリアアドバイザーによる相談や模擬面接など）を随時実施している。	（改善計画）キャリアサポートセンターと協議を重ねつつ、現状の進路指導体制を維持する。 （改善状況）進路指導担当教員の決定と同時に進路指導にも着手、学生の全員面談の開始により、学生の希望する企業への就活アプローチをより早く確実なものにしている。	a : 教員が学生一人ひとりの進路希望を把握することで、デザイン系の学部としては高い就職率を堅持している。 b : 学生が進路指導の教員を選択できるが、学生の人数差による負担が生じている。また専任教員であっても任期のある教員もあり、安定的な指導を鑑み指導担当の開始時期を見直すことを継続している。	今後もデザイン学部の目指すべき企業の候補を精査し、既卒生の就職先などの情報をリアルタイムで収集しつつ、現状の進路指導体制を維持していく。 2021年の3月で卒業生も8期まで輩出、卒業生のネットワークの構築、OG、OBの関係性構築も、今後の重要な位置付けにして進めていきたい。今後もデザイン業界における「デザイン教育」の質の担保は重要であると考えます。	学部就職特任教員の及ぶ役割とキャリアサポートセンターにより対応について協議を重ねつつ、現状の進路指導体制を維持する。
他大学のキャリア支援に関する取り組みなどを収集・分析し、キャリア支援体制の見直しなどに役立っているか。	毎月開催されるデザイン学部就職委員会においての情報交換、実績のある他大学、または学部と競合する大学のキャリア支援に関する現状を報告、必要に応じて資料を入手したり、調査をしている。	（改善計画）ホームページの活用を前提にして、デザイン学部受験生へ、これからの社会で「デザインでできること」のアピール、業態の変化に伴う形でデザイン業界の新しい地図を作成した。 （改善状況）デザイン学部に対応しい進路、企業を専攻別にピックアップをすることで指導担当する教員にも明確な目標が見えた。現在も「DS目指すべき就職先企業リスト」は継続している。	a : 特にデザイン系の競合大学、大学院の動向を注視することで、自学部の優位な点でアピールすべき部分が見えてきた b : 一般の大学のキャリア支援、就職支援体制の調査には目が向いていない。志望する業界がかぶる特にデザイン系の大学、学部の動向は注視する必要がある	他大学のキャリア支援と学生相談などの実例の取得や交流を実施する。主に首都圏デザイン系の大学の就職担当者研修で提案があった、関係の学部・大学間で連携して分野全体で学生をアピールする方法をさらに進めるべく検討する。	ホームページの活用を前提にして、デザイン学部受験生へ、これからの新しい社会で「デザインでできること」「デザインが求められる社会」についてアピール、業態の変化に伴う形でデザイン業界の新しい地図を作成する。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準2. 学生
2-4 学生サービス

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 学生生活の安定のための支援					
学生サービス、厚生補導のための組織を設置し、適切に機能させているか。	毎月開催している学生委員会で各コース、専攻のトラブルや対処ノウハウなどを共有するとともに、状況に応じて学務課や学生相談室と連携し対応している。	(改善計画) 学生の精神・心理・社会的な問題を類別し、全体を可視化できるシステム作りを行い、その上で適切なアドバイスを与える人的資源の確保を考える。 (改善状況) 計画が遂行されたことで、学生の抱える問題、または芽生えつつある問題の対応についてより解決へ向かう回数が増した。	a : アドバイザー制度を活用し、学生の有意義な大学生活を支援できる指導体制が構築できた。 b : さらにサポート体制の充実はもとより、リモートと対面の授業を活用したサポートで、問題のある学生が取り残されない工夫を重ねていく。	トラブルシューティングに早めに対処するための情報蓄積、分析、活用の具体策を検討する。	学生の精神・心理・社会的な問題を類別し、全体を可視化できるシステム作りを行い、その上で適切なアドバイスを与える人的資源の確保を考える。
奨学金など学生に対する経済的な支援を適切に行っているか。	学生支援等連絡会で報告された内容をもとに奨学生を把握し、指導に活用している。また、面談時に経済的な問題があると判断した場合は、学務課奨学金担当者と連携し問題を解決を図っている。	(改善計画) トラブルを生じる可能性のある学生の早期発見、早期対処・問題解決のシステム作りを検討する。 (改善状況) 計画を遂行した結果、問題なく機能している	a : 各学科に在学する奨学生の情報を共有し、学務課奨学金担当者と連携した結果、大きな問題なく経過した。 b : 現在も問題なく連携体制が継続している。	奨学生の生活背景を鑑みた細やかな対応策の検討が必要である。	トラブルを生じる可能性のある学生の早期発見、早期対処・問題解決のシステム作りを検討する。
学生の課外活動への支援を適切に行っているか。	サークルを担当する顧問教員だけでなく、学部の特色を生かした学外活動を企画し学生をサポートしている。	(改善計画) 学生の意見も取り入れ、教員・学務課との協働により、双方向の情報を集約し、対応策を検討する。 (改善状況) 計画を遂行した結果、問題なく機能している。新型コロナウイルス感染症の拡大により活動の制限が続くが、連絡は密に取れる状況。	a : サークル活動、各学科の学外活動などが報告され、学生生活が充実した様子が伺えた。 具体的な活動への参加度合、満足度調査 b : 等の詳細な実態把握が必要。 学生間の確実な連絡手段、新規の参加、活動開始に向けた手続きの方法など検討が必要	学外活動に参加する場を増やす工夫や参加学生を増やすこと、また社会生活に上手く対処できない学生を導くことの方策を考案したい。	学生の意見も取り入れ、教員・学務課との協働により、双方向の情報を集約し、対応策を検討する。
学生の心身に関する健康相談、心的支援、生活相談などを適切に行っているか。	学修支援室、カウンセラーを配備し、必要と思われる学生には自ら、または担当教員の紹介により相談する機会が与えられるシステムができた。活用する学生数も年々増えている。	(改善計画) 心理カウンセリングの他、精神疾患を有する学生への対策、学修障害等多様化する問題学生への総合的対策システムの構築が必要である。 (改善状況) 現状、通常的面談等により支援の進捗はあるものの新型コロナウイルス感染症の影響が大きい。	a : 学修支援、カウンセリングシステムに着手できたこと b : 多様な学生に対し、よりの確に対応できるスタッフの割り出しが必要であるが、対応には専門的な知識や経験を求められることもあり、学部の求める理想的な形ではない	学修支援室、カウンセラーの具体的な利用率を調査し、人的な補填を視野に継続した学修支援システムを考えた。	心理カウンセリングの他、精神疾患を有する学生への対策、学修障害等多様化する問題学生への総合的対策システムの構築が必要である。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準2. 学生
2-6 学生の意見・要望への対応

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 学修支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用					
学生への学修支援に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、学修支援の体制改善に反映させているか。	授業評価アンケートを全科目で実施している。また、在学生調査を各学年(新2年生、新3年生、新4年生)で実施している。さらに学修支援センターでは学修の問題を抱える学生の相談に個別に乗っている。主要な建物に匿名でも投函可能な意見箱(Box for Best Care:BBCと命名)を設置し、学長室が直接開箱することにより、ハラスメントを含めた学修上の訴えを受け付け、必ず回答している。 デザイン学部ではアドバイザーグループ制度(AG制度)での定期的なミーティングを実施し、その中で学修支援についてのアンケート調査を行っている。理解するのが難しい授業や、担当教員の指導方法、改善を望む点などを把握し分析と検討を行い、必要に応じて改善策を講じている。	(改善計画)学修ポートフォリオの何らかの形でのシステム化をおこない、学生自身が自己の学修内容を振り返りができるようにする。 デザイン学部の教員と教養科目担当の教員が情報共有できる機会を作る。 (改善状況)学修支援に関する改善策は進行しているが、学生個々の表面に出てこない問題を顕在化させるまでには、今以上にAG制度の拡充が必要と思われる。現状、教員1名あたり平均36名以上の学生を抱えるなど、担当教員の負担軽減に期待する他ない。	a : 2018年度より、授業アンケートおよび在学生調査の調査項目を見直し、データ取得方法をWebベースに変更したことで理解するのが難しいと回答する数が減少した。教員の指導法が改善された。 b : キャリアデザインファイルの作成、ポートフォリオの整備による学生自身による学部の学修振り返りとその内容の教員による把握を進めることが必要である。なお、デザインの開設科目については、教員間の情報共有ができていたが、教養科目担当の教員とは情報の共有が難しい。	授業アンケートや在学生調査で取得したデータのIRセンターでの解析をすすめる。 ミーティングの回数を増やし、現在より短いスパンで、学生からの情報を得る。授業用サイト(Moodle)を整備拡充し、安定的な授業のサポートから、遠隔授業の対応でも学修支援が可能となるよう明確な体制を整備する。	学修ポートフォリオの何らかの形でのシステム化をおこない、学生自身が自己の学修内容を振り返りができるようにする。 デザイン学部の教員と教養科目担当の教員が情報共有できる機会を作る。
② 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用					
学生生活に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、学生生活の改善に反映しているか。	学生生活に対する学生の意見要望は、第一義的には「AG教員」が受け、学部ごとに各種アンケート調査などを通じた把握を行なっている。学務課・学生係では、ハラスメントを含めた学生意見を広く受け止める窓口を設けている。また、意見箱(BBCボックス)を学内に設けることで日常的な要望を集約し、学生生活の改善に役立てている。 上記①の授業評価アンケートに学生生活に関する次の質問項目を設けている。「学生生活は順調であるか」「悩み事や相談事はないか」これらの回答を分析し、必要に応じて個別の面談等を実施している。また、回ごと、年度ごとに統計をまとめ、各項目の推移を分析しながら、学生生活の改善に努めている。	(改善計画)精神的な問題を抱える学生の数が増加傾向にある。そしてほとんどが休学や退学をする現状にある。卒業まで安定した学生生活を送れるように、学部と学務課および学生相談室の連携を図り、サポートを強化する。 (改善状況)学生支援の方法として実施する授業評価アンケートの質問項目、実施方法に形骸化した部分がないか、そして問題が発生した場合の解決プロセスにも検証が必要と思われる。	a : 定期的にアンケートを実施することで、問題を発見した時点で速やかに対処することができた。 b : 精神的な問題を抱える学生に対して、指導が十分でないことがある。また障がいとの度合いとは関係なく担当教員の精神的な負担は日に日に大きくなっており、早急な改善が望まれる	アドバイザーグループ単位でのミーティングに加え、必修の演習科目内でも定期的にコミュニケーションを図り、必要に応じて面談するなど、気付きの環境を作り出すことで、見落としがないよう仕組みを強化する。	精神的な問題を抱える学生の数が増加傾向にある。そしてほとんどが休学や退学をする現状にある。卒業まで安定した学生生活を送れるように、学部教員と学務課および学生相談室の連携を図り、サポートを強化する。
③ 学修環境に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用					
施設・設備に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、施設・設備の改善に反映しているか。	上記②と同様に学生課の窓口、BBSなどの意見箱など、多様なチャネルを通じて学生の意見をくみあげている。「AG教員」を通じた聞き取りやアンケートからも要望を吸い上げている。特に教室環境、インターネット環境、購買、トイレなど、学生生活の拡充に要望の多いものには改善に取り組んでいる。毎期末ごとに実施される授業評価アンケートには、学部の施設・設備に関する質問項目を設けている。また演習授業では、実際に受講する学生から意見や要望がないか確認することに努め、実際に教室内の空調や演習室内の設備についての要望には速やかに対応するよう努めている。	(改善計画)身体的障がい(視覚的、聴覚的)を持つ学生に対する環境整備を行う。今後を見込み、種々のケースを想定し検討する。 (改善状況)身体的な障がいを持つ学生には、学生相談室、学修支援センターとの連携が必須なことから、これまで何度か連携を図ってきた。	a : 学生からの意見や要望に対して速やかに対処することで、年々申告する数が減少している。 b : 身体的障がいを持った学生への対応。緊急時の状況に応じた対応の実例を積層して備えたい	演習授業で使用する作業机や椅子が購入から10年経ち、破損や汚損が目立つ。作業環境を快適に保つためにもそれらのメンテナンスや入れ替えを計画する。学生からの要望に対応して、演習室内には大型のモニターの設置や、各授業毎に必須なアプリをインストールした貸出用Macbookやipadなどを常備して、学生が制作内容により携行できる専用デバイスの購入を積極的に進めている。	身体的障がい(視覚的、聴覚的)を持つ学生に対する環境整備を行う。今後を見込み、種々のケースを想定し検討する。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準3. 教育課程
3-1 単位認定、卒業認定、修了認定

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの策定と周知					
①-1 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーを定め、周知しているか。					
各学部、研究科が定める教育研究上の目的を達成するための適切なディプロマ・ポリシーを定めているか。	大学全体で定める共通のディプロマ・ポリシーを定めている。さらに、大学共通のディプロマ・ポリシーに専門的能力を具体化した形で、学部ごとにディプロマ・ポリシーを定めている。大学院については、専攻ごとに定めている。デザイン学部では、学部の学びによって得られる6つの力、「チーム力」「集中力」「提案力」「実現力」「取材力」「発想力」を人材育成の柱としたシンボルマークを作成、学部説明においては、大学に求められる「学士力の保証」として6つの力を引き合いに出し、目指す目標として定義している。	-----	a : 3年次の専攻ごとに配属が決まった段階で学生のディプロマ・ポリシーの達成度を自己・他者（教員）による評価を実施し、これまでの自分と今後の自分について確認している。 b : 2020年度以降、専攻別の入学に伴う評価の方法の策定は必須であり、これまでの問題点を解決した評価の方法も含めた改善が必要。	-----	-----
ディプロマ・ポリシーをどのように公開しているか。また、その方法は適切か。	大学のウェブサイト、大学案内、学生便覧において公開しており、適切な公開方法である。	-----	-----	-----	-----
② ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の策定と周知					
ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等を適切に定め、周知しているか。	各科目とディプロマ・ポリシーに定めたラーニングアウトカムズの対応関係を示したカリキュラムマップを作成し、科目ごとの到達レベルをシラバスで記述している。1年から2年の進級要件および卒業研究の着手要件を定め、学修状況に応じた科目履修を進めるとともに学修が困難な学生の早期の発見に努めている。進級要件、卒業要件は、学生便覧に記載し、学生および教員に配布している。カリキュラムマップは、1年次に配布する履修案内およびウェブに掲載している。演習における成績評価についても教員の主観的評価でないことを示すために、明確な評価基準を1年次から4年次までの演習科目で設けて、それを学内ウェブサイトや授業で周知している。	-----	a : 卒業研究の着手要件の見直しを進めている。演習における成績評価が成果物の評価に偏らず、目標への到達プロセスを意識し、取り組む学生の姿勢に効果が表れている。 b : ディプロマ・ポリシーを踏まえるための単位認定には履修前に学生への周知説明が前提であり、各学生の主体的な学びの姿勢を引き出すカリキュラムの作成が今後も必要である。	卒業研究の着手要件について、進級率、卒業実績などのデータをもとに、継続的に見直しており、2019年入学者から新たな要件に見直した。専門研究・卒業研究の着手要件を見直し卒業要件として新たに「スキル演習」の単位修得数をも加えることで、これまで修得率が悪かった専攻、コースの当該科目への取り組みが変わってくるのが期待できる。	-----
③ 単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準の厳正な適用					
単位認定基準、進級基準、卒業・修了基準を定めて、これを厳正に運用しているか。	各科目の単位認定にあたっては、シラバスに単位認定基準(成績評価基準)を明示し、各教員がシラバスに従った評価を行っている。シラバスが学生と教員との契約であるとの意識を、全学教育委員会を通じ、学部教務委員会、学部教授会で教員へたびたび周知している。卒業認定については、学部教務委員会および教授会、教授総会において、それぞれ根拠資料を回覧し、厳正に運用している。	-----	a : 学部教務委員会、教授会、教授総会、学務課が相互にチェックしあいながら、厳正な基準の運用ができています。 b : 2020年度からの新カリキュラムにおける進級基準、単位認定基準、そして卒業研究着手要件の認定など引き続き精査が必要である	教職員が高い意識を保ち、連携するための情報の共有と研修の充実を行う。またそのためのワーキンググループの形成も必要とされる	-----
単位認定基準、卒業・修了基準を定めて、教育課程の編成・実施に反映させているか。	現状の教育上の問題点を学部教授会、教授総会、およびアゴラで確認することにより、現状カリキュラムの問題点を共有している。学術や社会の変化に加えて、各科目の単位取得状況、退学率、進級率をモニタリングすることによって、カリキュラムの継続的見直しを学部教務委員会が中心となり、4年に一度の頻度で行っており、その見直しの全学的な調整を全学教育委員会がおこなっている。	(改善計画) ラーニングアウトカムズのとくにコンピテンシーの定量化をすすめるとともに、コンピテンシーの育成により配慮したカリキュラム設計をすすめる。 (改善状況) 計画を進めるものの検証の時間を確保していない	a : 各分野の専門力育成のための授業は提供されているが、コンピテンシーの育成が十分にされていない。 b : 学部教務委員会の機動力をさらに生かすこと、その見直しの頻度と対象の評価に対して精度を上げることで、より厳正な基準を策定できるようにしたい。	-----	ラーニングアウトカムズの中でも特に、コンピテンシーの定量化を進めるとともに、コンピテンシーの基準を育成することにより、厳正な適用に配慮された新たなカリキュラム設計をすすめる。
単位認定など成績評価の公平性のためにどのような工夫をしているか。また、GPAなどをどのように活用しているか。	担当教員による判断のばらつきが出ないよう、成績分布に関してガイドラインを設定し、全科目の成績分布を教授会、教授総会もしくはアゴラで確認することにより、教員相互にチェックしあっている。G.P.A.を算定し、成績表によって学生へ周知するとともに、G.P.A.を単位の上限キャップの緩和、早期卒業制度の適用、コースの決定に活用している。デザイン学部では演習における評価基準を設けたことで、教員ごとに偏りのない単位認定を行うことが可能になった。	(改善計画) ルーブリックを用いた卒業研究の評価および卒業研究の各ラーニングアウトカムズへの対応の実質化をおこなう。 (改善状況) 単位認定の基準を設定することにより厳正な適用が進められている。	a : 評価基準の統一を一層進める必要がある。中でも専攻間における卒業研究評価の統一が望まれる。授業評価アンケートの結果や成績評価分布の公開（アゴラや教授総会）によって科目による自己点検として効果がある。4年次前期、専門研究の時点での評価をもとに、後期に履修する卒業研究の評価を検証するなど、継続的な学びの評価も含めたロングスパンな基準の策定も望まれる。	演習による評価基準を定めたことの検証を今後も進めてより明確にしている。	ルーブリックを用いた卒業研究の評価および卒業研究の各ラーニングアウトカムズへの対応の実質化をおこなう。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準3. 教育課程
3-2 教育課程及び教授方法

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① カリキュラム・ポリシーの策定と周知					
教育目的を踏まえ、カリキュラム・ポリシーを定め、周知しているか。	学部の教育目的を踏まえ、カリキュラム・ポリシーを定めている。大学のウェブサイト、大学案内、学生便覧において周知している。	----	----	----	----
各学部、研究科が定める教育研究上の目的を達成するための適切なカリキュラム・ポリシーを定めているか。	大学全体で定める共通のカリキュラムポリシーを定めている。さらに、大学共通のカリキュラムポリシーに専門分野を具体化した形で、デザイン学部で必要とする学士力の保証をもとにカリキュラムポリシーを定めている。	(改善計画) 学修成果のモニタリングをもとに、カリキュラムポリシーが不変でよいかを不断に点検し、必要があれば見直していくことを検討する。 (改善状況) 2020年度より専攻別入学を実施、併いカリキュラムの改編で、カリキュラムポリシーを見直し、より専門性の高い科目の設定とカリキュラムを履修する流れを把握するため、専攻、コース別のカリキュラムツリーを作成した。	a : カリキュラムポリシーの設定はおこなったが、教育の現状をもとに、その継続的な見直しを議論していく必要がある。 b : 2020年度より実施のカリキュラムについては年度ごとの検証と、完成年度を迎えてからの最終的な検証を必要とする	-----	学修成果のモニタリングをもとに、カリキュラムポリシーが不変でよいかを不断に点検し、必要があれば見直していくことを検討する。そのための学部内ワーキンググループも設置する準備がある。
カリキュラム・ポリシーをどのように公開しているか。また、その方法は適切か。	大学のウェブサイト、大学案内、学生便覧において公開しており、適切な公開方法である。	----	----	----	----
② カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの一貫性					
カリキュラム・ポリシーとはディプロマ・ポリシーとの一貫性が確保されているか。	カリキュラムポリシーでは、全学部共通の6つのラーニングアウトカムズを育成するプログラムを定めており、このうち、専門力の部分に学部の特色があらわれている。ディプロマポリシーにおいても、6つのラーニングアウトカムズの達成を規定しており、両ポリシーは整合している。	----	----	----	----
③ カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系的編成					
カリキュラム・ポリシーに即した体系的な教育課程を編成し、実施しているか。	科目全体をカリキュラム・ポリシーで示した「教養教育科目・基礎教育科目」及び「専門科目」に分け、さらに専門科目は「専門基礎・共通科目群」と「専門科目群」から構成される体系に沿った具体的なカリキュラムを編成した。各学部においては、学部のカリキュラムポリシーにそれらの科目・科目群の具体的な内容を記載し、それに対応する履修科目を編成している。	----	----	学部の特徴を生かし、デザインの学びを体系的な教育課程に落とし込んだカリキュラムを短期と長期の目標として、2018年度から教務委員、学部長を中心とした検討ワーキンググループを設けて検討した。	----
シラバスを適切に整備しているか。また、作成にあたって第三者による検証を実施しているか。	シラバスは、全学で共通のものを教務システムから授業担当の教員が記入する。シラバスが学生との契約である意識を徹底し、評価方法の具体的な記載、ラーニングアウトカムズとの対応などまで含めて、記載内容を明確に示すよう執筆する教員に通知している。期限までに執筆されたシラバスは、学部の教務委員長が中心となり、記入者以外の教員がチェックするなど第三者の視点で評価、また、事務職員も同様に内容を確認している。各演習科目によってカリキュラム内容、表記に偏りがないように統一した整備を行なっている。	----	a : それぞれの特色を活かしつつ、各専攻に偏りのないカリキュラムを実施している。 b : これまでシラバスの執筆には印刷の都合で締め切りがあり、前年度の授業評価もそこそこに次年度の記述を終了、新年度を迎えるパターンであったが、今年度よりデータ化され改善しつつある。	-----	----
④ 教養教育の実施					
教養教育を適切に実施しているか。	蒲田キャンパスの2学部では、学部ごとに教養教育カリキュラムを編成している。デザイン学部においても、外国語、自然、人文社会、ウェルネスの各科目群の実施を教養学環が担当しており、学部との調整を綿密に行っている。海外語学研修などの海外プログラム、スキー実習など特色ある科目も提供している。	(改善計画) 同じ科目群内や異なる科目群間の関係ある科目間の関係をネットワーク図等で可視化し、教養教育全体や科目間関係の学生理解を深め、学修効果を深める。 (改善状況) 教養教育科目と専門教育科目の連携、学部共通の到達目標などですり合わせが必要であり、課題提出スケジュールの重複による一時的な負荷、期限設定のは直近の課題である。	a : 教養教育科目の各学部との連携の強化 教養教育全体像の可視化と公開 b : 2コマないし3コマと連続して受講する演習系科目の時間割は、設定の都合上その演習科目とのつながりがある時限設定を鑑みるなど、時間割の全体を俯瞰した解決方法も積極的に提案したい。	従来より、教養教育科目の教育は学部との連携によって行われてきたが、今後も連携と自主性のバランスを保ちながら、教養教育を実施する。そのための確認は必須である。	同じ科目群内や異なる科目群間の関係ある科目間の関係をネットワーク図等で可視化し、教養教育全体や科目間関係の学生理解を深め、学修効果を深める。
教養教育を担当する組織の活動状況等を適切に把握しているか。	教養学環は、独自の教授会、独自の教務委員会を持ち、大学評議会、教育力強化委員会、企画推進委員会そのほかの全学の委員会に独自の委員を参加させている。また、学修支援センターの運営に大きく関与している。	(改善計画) 2キャンパスや各科目群教員間の連携・情報共有が一層重要になってくるので、ICTを活用するなどして、活動状況・情報の可視化と教員間での共有を促進する。 (改善状況) シラバスのデータ化、学部公式の学内サイト拡充、教員間の緊密な連絡などで改善されてきた。また学部教務委員会の役割をより明確化することで、連絡の不達がなくなるなどの改善も見られた。	a : 教養学環の組織の維持・活性化の促進 b : 教養教育の目的・目標の教養教員全体での共有と目標達成への協働の促進と連携	新任教員を補充する際には、担当科目の専門性を有していることはもちろんのこと、分野に精通した学外の研修など、多種、多面的な教養教育活動を支えることができる教員を積極的に採用する。	2キャンパスや各科目群教員間の連携・情報共有が一層重要になってくるので、ICTを活用するなどして、活動状況・情報の可視化と教員間での共有をさらに促進する。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準3. 教育課程
3-2 教育課程及び教授方法

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
⑤ 教授方法の工夫・開発と効果的な実施					
アクティブ・ラーニングなど、学生の主体的な学びを促す授業内容・方法に工夫をしているか。	アクティブラーニング、グループ学修、プロジェクトベースドラーニング(PBL)について、学部内ではアゴラ等で紹介、全教員が参加する全学教職員会においても手法を紹介するなど、授業ごとのこうした手法の活用の有無について、教員への授業方法アンケートでモニタリングしている。これらのうち、アクティブラーニングについては、教員による授業評価の評点項目としている。	(改善計画) 反転授業などを支える大容量データを配信できるIT環境を整備し、反転授業の撮影など教材準備を行う部署を設置する。 (改善状況) 新型コロナウイルス感染症の影響もあり、オンラインを活用した「反転授業」は期せずして急ぎの実施となった。なお大容量のデータを配信、またはインタラクティブな通信環境整備への期待は切実であり、一時的な対応でも、オンラインからオンデマンドへ、時間帯の設定による授業内容の工夫も考えたい。	a : 授業方法アンケートの教員への実施 b : 反転授業などを支えるインフラが動画配信など大容量配信には十分ではない。授業ごとの課題(宿題)が一時期に集中することやそのボリュームの検証が必要である。	授業方法アンケートを継続的に実施し、IRセンターにおいて結果の解析を行う。	反転授業などを支える大容量データを配信できるIT環境を整備し、反転授業の撮影など教材準備を行う部署を設置する。
教授方法の改善を進めるために組織体制を整備し、運用しているか。	「教育力教育委員会」を設置し、教員の教授法について教員による授業点検を定期的に行っている。	(改善計画) 学生による教員の授業評価、成績分布などを、学部教務委員会、教授会、アゴラなどで振り返り、その授業改善への利用が望まれる。 (改善状況) 2020年度の専攻別入学に向け、学部アゴラでの授業実例紹介や、演習授業でのアクティブラーニングの検証、PBLの評価項目などの確認をするなど、改善への意識を高める動機付けになった。	a : 教育力強化委員会を学長直属で設置し、学長室が事務補佐をしている。 b : 授業アンケート結果や成績分布をもとにした授業の改善が十分ではない。担当する教員の分野による教授法には極めて専門性の高い分野もあり、精通する教員が不在の場合、または評価できない場合の問題が継続してある。さらに、理解度の点で学生の意見も重要である	教授方法、教育改善などに精通した事務職員の継続的育成と教育方法を専門とする教員の採用をおこない、教員に対する教育支援組織を整備する。特に学生指導に注力する一方で、専門に精通する教員の研究時間確保も急務である。	学生の授業評価、成績分布などを、学部教務委員会、教授会、教授総会、アゴラなどで振り返り、その授業改善への利用が望まれる。授業評価の高い教員の工夫を視聴、ポイントを教員間で共有するなど、これまでの慣習にとらわれない改善の方法も必要とされる。
履修登録単位数の上限の適切な設定など、単位制度の実質を保つための工夫が行われているか。	学期ごと24単位を履修上限とし、前期G.P.A.の評価2.9以上優秀者に対して、28単位までの履修を認めている。15週の授業時間を講義曜日にかかわらず確保し、自然災害や休講に対する補講期間を設けている。シラバスに準備学修の欄を設け学生の予習・復習内容を具体的に指示・明記している。実際の授業外学修時間を授業アンケートによってモニタリングしている。	(改善計画) 八王子キャンパスにおいて、90分×15週の講義を100分×14週に改めることを検討(蒲田キャンパスにおいての実施予定なし) (改善状況) 蒲田キャンパスにおける90分授業は継続、またシラバスには共通して「準備学習」の項目を記し、予習、復習の記述を徹底するなど改善を試みている。	a : 授業外学修時間のモニタリングを授業アンケートの中で開始した。 b : 15週の講義期間をとる場合、再試験と学外実習(ボランティアや海外語学研修など)の期間が重複する。	授業科目ごとに、授業外学修時間を十分に取れない理由の解析をすすめる。または時間外学修を奨める授業内容の記述を工夫する、予習、復習の方法を明確にするなど、可能なことは多くある。	八王子キャンパスにおいて、90分×15週の講義を100分×14週に改めることを検討している。(蒲田キャンパスは該当なし)

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準3. 教育課程
3-3 学修成果の点検・評価

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用					
三つのポリシーのうち、特にディプロマ・ポリシーを踏まえた学修成果を明示しているか。	学部創設の4年目より、デザインの学びで身につく6つの力<チーム力、集中力、提案力、実現力、取材力、発想力>を教育の目標に掲げ、学部科目の設定を行ってきた。その結果としてこれまでに社会に貢献できる学生を多く輩出し、実学的な専門科目に加え、コミュニケーション力や論理的な思考力も身につけた学生は、政府の掲げる学士力（学位授与）の保証になると判断している。また常にカリキュラムを精査し、社会の求めに対して反映するべく科目を開設、2014年にはカリキュラム改編、2020年度には専攻別の入学とすることで、躊躇いなく理想的な目標への追求している	-----	-----	-----	-----
学生の学修状況・資格取得状況・就職状況の調査、学生の意識調査、卒業時の満足度調査、就職先の企業アンケートなどにより学修成果を点検・評価しているか。	学生の単位取得状況、進級率、卒業率については、事務局学務課、学部教授会、学部教授総会、学部教務委員会においてデータをまとめ、把握するように努めている。就職率、就職先については事務局キャリアサポートセンターおよび学部就職委員会で評価している。入学時および年度初めガイダンス時に在学生調査を実施し、その結果をIRセンターで解析の上、企画推進会議（学長ミーティング）、そして学部教授会で報告、学部教授総会でも共有することに努めている。アンケートの結果などの詳細は学部アゴラでもテーマとして取り上げ、学部専任教員の全員が把握できるようにした。	（改善計画）ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法を確立する。卒業制作指導教員によるコンピテンシー（行動特性）評価などを実施する。また、学生の就職状況の質を評価する方法を検討していく。 （改善状況）ラーニングアウトカムズの評価と実際の演習課題制作、卒業研究での意識付けは学部内で浸透しつつあるが、個人差のある評価尺度に対する測定方法は、依然として制作方向が多面的なため困難を極めた。対応策として複数の教員による相対評価で学修成果の客観的な測定が可能となるよう解決を試みるも現在進行形である。	a : 進級率、卒業率、就職率などの指標が取られ、在学生調査が行われている。 b : 学修成果の可視化において、現在、数値化している指標は取得単位数とGPAのみである。今の数字とはまた異なる方法で学修内容が可視化されることが望ましい。また学生輩出先に関しても就職率以外により就職の質を表す指標が必要である。	進級率、卒業率、就職率、在学生調査などの結果が、キャリアサポートセンター、学務課、法人の広報部などに最新のデータとして一括されるように、IRセンターでの一元管理、解析が望まれる。	デザイン学部の現状、求める学生像に照らし合わせたラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法を確立する。コンピテンシー評価、卒業制作指導教員によるコンピテンシー評価などを実施するだけでなく学生の制作経過を含めた検証を試み検証へと繋げたい。また、学生の就職状況の質を評価する方法を就職指導と並行して検討していく。
② 教育内容・方法及び学修指導等の改善へ向けての学修成果の点検・評価結果のフィードバック					
学修成果の点検・評価の結果を教育内容・方法及び学修指導の改善にフィードバックしているか。	各学生の単位取得状況については、担当のAG教員が把握し、各学生と頻りに面談することにより、学生指導にフィードバックしている。さらに担当教員は全てほぼリアルタイムで科目の教育連絡会における出欠席、履修状況を共有しており、特に問題のある学生についてこのときに把握した各学生の学修状況が教育内容・方法の改善に役立っている。	（改善計画）ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法の確立に合わせて、カリキュラム改善を科学的に検討する体制の整備とそれを支援する全学的な組織の整備が必要である。 （改善状況）2014年よりデザイン学部独自で開催する科目教育連絡会の実施意義がより大きくなり、月例の実施のまま継続したい	a : AG教員による面談、教育連絡会により学生の学修状況の把握され、問題の解決に結びつく機会が多数見られるようになった。 b : 今後もカリキュラム改編がより客観的な指標に基づいて行われることが望まれる。	AG担当の教員による面談の継続的な実施および面談率の向上。または学生との緊密な連絡方法の拡充も急がれる。	ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法の確立に合わせて、計画的なカリキュラム改善を検討する体制の整備と、支援する全学的な組織の整備が必要である。